

天と地の上で

教皇とラビの対話

著者

教皇フランシスコ／ラビ・アブラハム・スコルカ

訳者

八重樫克彦／八重樫由貴子



SOBRE EL CIELO Y LA TIERRA
por Jorge Bergoglio y Abraham Skorka

教皇フランシスコの人柄と信条が明らかにされる対話。
キリスト教とユダヤ教の間に温かで肯定的な関係を築く。

天と地の上で／目次

かがえのない経験としての対話	アブラハム・スコルカ	5
歩み寄りの鑑としてのレリーフ	ホルヘ・ベルゴリオ	10
第1章	神について	14
第2章	悪魔について	21
第3章	無神論者について	25
第4章	宗教について	30
第5章	宗教指導者について	41
第6章	弟子について	55
第7章	祈りについて	68

第8章	罪について	79
第9章	原理主義について	83
第10章	死について	91
第11章	安楽死について	105
第12章	高齢者について	110
第13章	女性について	116
第14章	中絶について	121
第15章	離婚について	123
第16章	同性婚について	126
第17章	科学について	134
第18章	教育について	139
第19章	政治と権力について	145

第20章	共産主義と資本主義について	164
第21章	グローバリゼーションについて	170
第22章	お金について	174
第23章	貧困について	180
第24章	ホロコーストについて	191
第25章	70年代について	206
第26章	新大陸の征服、社会主義とペロン主義など、歴史的事象について	215
第27章	アラブ対イスラエル、その他の対立について	228
第28章	宗教間の対話について	237
第29章	宗教の未来について	241

日本語版の出版社によるお断り

本書は、教皇フランシスコがブエノスアイレスの大司教で枢機卿の時代に、ユダヤ教のラビ、アブラハム・スコルカ師との間で交わされた対話集である。

原書の再刊に当たって、初版に一切修正を加えない条件で再刊が許可されたという。本書の中の発言は教皇になっても変わらないと認めた姿勢に、高い評価が与えられたと同時に、本書は教皇フランシスコの信条・信仰・人柄を伺うことのできる良書と見なされている。

初版（二〇一〇年）当時の著者名はホルヘ・ベルゴリオであった。日本語版においても、その名を使用するのが適正であろうが、本文中において対話の発言者の名を「教皇」に換えた点につき、日本語版の読者の了解をいただければ幸いである。

かけがえのない経験としての対話

アブラハム・スコルカ

《神は彼らに言われた……》(創世記一章二八節)は、聖書に記された最初の対話である。創造主が語りかける唯一の被造物は人間だ。また「創世記」の物語を読むと、人は自然や同胞である人間、自分自身、神と関わる特別な能力を持つてゐることが分かる。

今述べた人の持つ関係は、それぞれ互いに独立して区切られたものではない。自然との関係は、人が自然を見つめ、そこに宿る神秘を認識するところから生まれ、同胞との関係は、相手に関心を持ち、共に行動する経験の積み重ねから生まれる。神との関係は、人がそういった自然や同胞との関係を育むと同時に、内面の最も深い部分で、自分自身との対話ができるようになった結果、生まれるものである。

真の対話には相手への関心、理解が不可欠で、思考する存在である人間の本質がはつきりと表れる。文豪エルネスト・サバトは『人と宇宙』の序文で《人は遠方へと旅立つか、他者の知恵を求めるか、自然を研究するか、あるいは神を探し求める。ところが、やがて自分の後を

追っていた亡霊が自分自身であったことに気づく」と述べている。

言葉は他者との対話における伝達手段にすぎないが、発せられる言葉が同じであっても、意味まで一緒とは限らない。同じ社会で暮らし、同じ言語を共有していても、取り方次第で意味は大きく違ってくるものだ。よって対話では、相手の言わんとすることを理解し合う必要がある。

《人の息は主の灯、^{ともしび}腹の底まで探り出す》(箴言二〇章二七節)。対話するとは、深い意味では、内面を照らし、明らかにすべく自分の心を相手の心に近づけることを指す*。

真に対等なやり取りがなされたとき、人は他者との相似点に気づく。同じ問題、無数の解決、共通する願い……相手の心に自身の心が映し出され、両者に宿る神の息吹^{いぶ}きが合流し、けっして揺るがぬ絆を共に築くことが可能となる。《三つ撚^よりの糸は切れにくい》(コレヘトの言葉四章一二節)という言葉のように。

ベルゴリオ枢機卿と私の場合も、互いに歩み寄り、相互理解に至るまでに何度となく対話した。一期一会^{いちごいちえ}のかけがえのない経験を積み重ねた結果、長い友情への道が敷かれたのだ。日取りと場所を決め、気兼ねなく会話する。話題はアルゼンチンの社会状況、国際情勢、目にした卑劣な行為や崇高な振る舞いといった日常のさまざまな出来事だ。まったく二人きりの対話ではあったが、そこにはたえず偉大なる存在が同席していた。その名を覚えて繰り返す必要はないだろう。

いつしか各自テーマを持ち寄るのが習慣となった。

コミュニティー・センター（シナゴーク）にある私のオフィスで会ったとき、私は部屋の壁にかかった額入りの文書を順番に説明した。有名なユダヤ思想家でラビ、アブラハム・ヨシユア・ヘシエルの手稿のところまで来ると、ベルゴリオはその隣にある額に目をとめた。何年か前、ユダヤ教の新年を祝う儀式に招かれた折、シナゴークで彼自身が述べた祝辞だ。自ら綴り、署名した文書をひたと見つめるベルゴリオ。その辺に散らかったものを片づけながら、そんな彼の姿を私は黙って見守っていた。

あの瞬間、彼の脳裏に何が去来したのだろうか？ 私は異なる宗教間の対話を続けてきた証、あかし自分にとってかけがえない文書を大切に託しておいたまでだが、一体彼にはどう映つたのだろうか？ 興味をそそられたが、あえて問わなかった。ときには沈黙がすべてを物語ることもある。

それからだいぶ経って、大司教区本部のベルゴリオの執務室で会った日のこと。われわれは、スペイン語圏の詩人たちの作品に映し出される宗教的感情について話し合っていた。「二巻のいい選集があつてね。君に貸すよ。今、書斎から持ってくるので、待っていてほしい」と告げ、彼は部屋を出ていった。狭い執務室に一人残された私は、何の気なしに棚に飾られた写真を見やる。たぶん、どの人も彼にとってとても大切に違いない。そんなことを思いながら一つ一つ眺めていると、額に入った一枚の写真が目にとまった。いつだったか、今日のように

会った際、二人で撮ったスナップショット……。

衝撃で声を失うと同時に、あの瞬間の彼の沈黙の意味が理解できた。しかも、この本を出そうと決めたのは、その写真を撮った日のことだったのだ。

ユダヤ教のラビとして生きるとは、神との特別な約束を交わすことであり、神の戒律の枠組みのなかで暮らしていく信者以上に、法を教える側としての厳しい制約を強いられる。預言者たちと同様、孤独のうちに精神修養を成し遂げた後、自分の得たものを世に伝え、還元する責務を負っている。個のなかで熟成された精神的財産は、大勢の人々と分かち合つて初めて意義を持つ。

ラビとして日頃、話し言葉に配慮する一方、書き言葉にも気を配り、表現を磨く努力を続けている。音声で発せられた言葉は、時間が経つと意味がぼやけ、ゆがんでしまうこともある。文字で記された概念は、文章という形で、多くの人の目に触れる。

そこで、本書の対話を始めるに当たり、ベルゴリオ枢機卿と私は次の二点で合意した。中心テーマは人間とその問題。自然なやり取りを心がけ、話し言葉を書き言葉に落とす。

われわれの対話が一冊の本になれば、そこには読者という参加者が加わることになる。内輪の対話が公の会話へと変わるため、リスクを覚悟で心を開かねばならない。けれども、他者との対話こそが、人間の知性を育む唯一の道で、それによってさらに神へ一歩近づけるものと、私は確信している。

*息とは「創世記」(二章七節)で神が人に吹き入れたものを指す。魂とも霊とも訳されるが、ここでは「心」と解釈されている。

歩み寄りの鑑としてのレリーフ

ホルヘ・ベルゴリオ

以前、ラビ・アブラハム・スコルカは、私のインタビュー集の序文で、ブエノスアイレス大聖堂の正面を彩るレリーフについて触れている。ヨセフと兄弟らの再会。積年の空白を埋める抱擁の瞬間。涙にむせび、「父上はご無事ですか？」と尋ねたかもしれない。この場面をアルゼンチン共和国の国家統一のさなかに選んで刻んだのには、それなりの理由があるはずだ。国民同士の再会、"歩み寄りの文化"の実現を願うことではないだろうか。これまで何度となく述べてきたが、われわれアルゼンチン人にとって、この"歩み寄りの文化"を実現させるのは容易なことではない。過去の歴史がもたらした断絶や対立に傾きがちだからだ。その意味では、橋を架けるよりも壁を築くほうを重視してきたとも言える。再会の場面を描いたレリーフのような、抱擁や感涙、父の安否を問う姿勢、残された遺産や祖国のルーツを問う姿勢に欠けている。つまりは対話が不足しているのだ。

だが、本当にアルゼンチン人は対話を好まないのか？ 私にはそうではなく、むしろ対話を

成り立たせなくする姿勢が要因に思えてならない。何らかの優越感、黙って他人の話を聞けな
い、疑念、偏見……ほかにも理由はあるだろう。

真の対話は、他者への敬意、相手がよい話をもたらしてくれるという信頼から生まれる。言
い換えれば、相手の物の見方や意見、提案を受け入れる余地があるということだろう。対話に
必要なのは温かな受容であって、先入観による決めつけではない。対話を成立させるには、こ
ちらのガードを緩め、家に迎え入れ、真心をこめてもてなすことを覚えなければならぬ。

日常生活は対話を妨げる障壁にあふれている。不正確な情報、噂、偏見、誹謗、中傷。そ
れらセンサーシヨナリズムが他者との関わりの機会を阻んでいることは言うまでもない。そう
やって歩み寄りや対話はずまずかさかされているのだ。

にもかかわらず、レリーフは今日もなお、大聖堂正面からわれわれを誘っている。

ラビ・スコルカと私は有意義な対話を繰り返してきた。どのように始まったのか、今となっ
ては定かでないが、互いのあいだに何の壁も遠慮もなかっただけは確実に言える。それは偽
りのない彼の気さくな人柄によるところが大きい。ひいきのサッカーチーム、リーベルが負け
た後、「めんどりの煮込みでも食べに行こうか」とからかっても、笑って許してくれるほどだ。

これまでしてきた対話のいくつかを出版したいと言われた際、考えるまもなく私の口から
承諾の返事が出ていた。何の疑問も持たずに同意できたのは、長年にわたる二人の会話が互い
の友情をより強固にしただけでなく、信仰の違いがあっても、共に歩んでいかれるという実例

だったからだと思う。

スコルカの前で、カトリック教徒としてのアイデンティティーを笠に着ることはなかった。それはユダヤ教徒である彼も同じだ。互いへの尊敬の念もさることながら、両者の対話が異なる宗教間の対話であることも自覚していたからだろう。われわれの挑戦は、尊敬と愛情の念をもって、より完璧なものを目指し、神の御前みを共に歩むことだった。

本書はその道のりを証するもの、私にとってスコルカは親友で、兄弟のような存在でもある。さまざまな考察を繰り広げるあいだ、互いに心の目であるレリーフを、歩み寄りの鑑かがみとして約束の地のごとく見つめていたに違いない。

* 「めんどり」には臆病者、腰抜けの意味もある。コバ・リベルタドーレス（南米クラブチーム王者を決める選手権）一九六六年大会の決勝で惨敗したアルゼンチンの名門リーベル・プレートに、他チームのサポーターたちがつけた不名誉なあだ名。